

四 岩間大藏

大槻盤溪

要旨

礮聲雷の如く、矢丸雨下する危地に置かれながら、幸にして恙無きを得た岩間大藏が、その怯懦の性を一變して驍名をなした所以のものは、實に信玄の異常なる措置が當を得た結果たる事を知らしめ、名將信玄の人となりの一端を偲ばしむると共に、鍛鍊修養の法如何のかゝる所の大なる事を悟らしめる。形式的には上・下の顛讀法「豈……哉」の反語法等を授けて、これに習熟せしめる。

解説

【作者】大槻盤溪 オホツキバンケイ 名は清崇、字は士廣、盤溪又は寧靜子と號す。仙臺侯の侍醫大槻玄澤の第二子である。初め父に業をうけ、ついで江戸にいでて昌平齋に學び、後東海・畿内・長崎に遊歴し、天保中藩の儒員に列した。年三十二再び江戸にいでて侍講となる。嘉永年間夙に西洋砲術を講じてその蘊奥をきはめ、同六年ペリ來朝の際、盛に開國説を主張した。文久壬戌仙臺に移つて義賢堂學頭となり、明治戊辰の役、奥羽諸藩合従して擧兵し、仙臺藩これが盟主となるに及んで、盤

溪は推されて軍國文書をつかさどり、事敗れて獄に投ぜられた。既にして赦され、爾來江戸に來住して優游自適した。明治十一年歿。享年七十八。
孟子約解・近古史談・寧靜閣詩文集等の著がある。
【出典】近古史談 四卷
近古史談は織篇・豐篇・徳篇の三篇百二十四章よりなり、當時の英主・名將・猛士・悍卒・驍勇・節烈等の事實で士氣の激勵に益し、民風の振興に利あるものを稗史・野乘より採つて漢文に譯述し、これに小評を加へたもので

ある。

釋義

【岩間大藏】イハマダイザウ 傳未詳
【爲人】ヒトトナリ (一)うまれつきの性質。性格。人がら。(二)容貌風采。人品。ここは(二)の意。
【魁梧】クワイゴ 身體が大きくたくましいこと。
【嚴然】ゲンゼン 威あつて犯し難いさま。おごそかにおももしいさま。
【丈夫】チャウフ 男子の美稱。立派な男子。周制で一丈は十尺。男子の背丈の正しきものとする故に「丈夫」に此の意がある。
【チャウフ】と濁つて讀むは國語。強いこと。堅固なこと。すこやかなこと。
【拔】ヌク ぬきんでる。拔擢する。
【伶人】レイジン 樂人。音樂を掌る官。「伶」は、音樂師。黃帝の時、伶倫なる者が音樂を作り、世々樂官となつたが故に「伶」にこの意を生じたといふ。
【士伍】シゴ 武士の仲間。「伍」は、禮記祭儀篇に「五人爲伍」とあり、もと五人一組の意。轉じてなかま・くみ等の意に用ひる。

漢文 初歩

本課は豐篇第一「岩間大藏」の論贊を除いた全文である。

【怯懦】ケフダ 臆病なこと。
【戰陣】センチン (一)陣營を設けて戦ふ場所。戰場。禮記祭儀「戰陣無勇非孝也」(二)たたかひの陣だて。博亦論「求之于戰陣、則非孫吳之倫也」ここは(一)で、「試之戰陣」は、大藏を戰場にだしてためしてみた所が。の意。
【常法】ジャウハウ 常に定まつた法則又は方法。ここは「きまりきつた普通の方法」位に譯す。
【馭】ゴヨス (一)馬をあつかふ。(二)轉じて、人をあつかひをさめる。ここは(二)の意。
【不可_レ以_レ常法_レ馭_レ焉】上・下による顛讀法。一・二の符號によつて顛讀し、更に顛讀の必要ある時上・下の符號を用ひる。初出の形であるから短文例等を課して練習せしめ、しつかりと會得せしむべき所である。
【西域】セイキキ 支那の歴史で西方諸國の汎稱。廣義には東西トルキスタン地方、中央アジアの諸國及び印度をも併せていひ、狹義には東トルキスタン、即ち現在の支那の新彊省を指す。この地方には所謂西域三十六國と稱

三八七

せられる小國が分立してをつた。前二世紀頃(前漢代)初めて支那人によつて交通路が開かれ、爾來八世紀(唐代)頃までは西域の全盛時代で、西方文化の東漸、東方傳播等に貢獻する所が大であつた。

の世初めて火薬を用ひて礮を造つたといふ。いしはじき。石弓。この時代既に銃砲が渡來して用ひられてゐたので、ここは「大砲」のこと。

【崑崙山】 コンロンザン (一)支那の上古の傳説・神話等を根據とした西方にある想像上の高山。金銀寶玉等を産するといふ。(二)支那の西藏と新疆省との境を東西に連五する大山系。ここは(一)の意。

【膽落神死】 タンオチシンシス 膽をつぶし氣を失ふ。【無復人色】 マタジンシヨクナシ もはや全く人間らしい顔色がない。

【鼓鑄】 コジュ・コチウ 金鐵の類をとかしいること。

【不レ中】 アタラズ

「鼓」は、ふいごを動かして火をあふる意。

【竟レ戰】 タタカヒヲヲフル

「鑄」は、金屬をとかし型に流しこんで器物を作ること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「チウ」は通音。史記貨殖傳「即鐵山鼓鑄。」漢書終軍傳「膠東魯國鼓鑄鹽鐵。」の註に「扇熾火謂之鼓。」

【無レ恙】 ツツガナシ 無事である。

ここは轉じて修養鍛錬するの意に用ひてゐる。

【恙】は音「ヤウ」(一)つが蟲。風俗通に「噉蟲。能食人心。古者草居、多被此害。故相問勞曰、無恙」とある。(二)轉じて、うれひ又は病の義となる。ここは(二)の意。

【如何】 イカン 「方法如何」の意。

【幡然】 ハンゼン (一)ひるがへる形。(二)さりとかはるさま。翻然に同じ。孟子萬章篇「既而幡然改。」ここは(二)の意。

【一日】 イチニチ ある日。

【無レ恙】 ツツガナシ 無事である。

【竹牌】 チクハイ 竹をたばねて楯として矢丸をふせぐもの。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸】 シグワン 矢と鐵砲の丸。やだま。

【幡然】 ハンゼン (一)ひるがへる形。(二)さりとかはるさま。翻然に同じ。孟子萬章篇「既而幡然改。」ここは(二)の意。

【礮聲】 ハウセイ 「砲聲」に同じ。

【無レ恙】 ツツガナシ 無事である。

「礮」は、「砲」の正字。もと機を以て石を發した攻具。元

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」の上に来る語に「スラ」の送假名のつくのが例である。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【豈足畏哉】 アニオソルルニタランヤ どうしておそれるに足らうか、おそれるには足らない。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「豈」は反語の辭で常に次の如き形をとる。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」の上に来る語に「スラ」の送假名のつくのが例である。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【豈足畏哉】 アニオソルルニタランヤ どうしておそれるに足らうか、おそれるには足らない。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「豈」は反語の辭で常に次の如き形をとる。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」の上に来る語に「スラ」の送假名のつくのが例である。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【豈足畏哉】 アニオソルルニタランヤ どうしておそれるに足らうか、おそれるには足らない。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「豈」は反語の辭で常に次の如き形をとる。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」の上に来る語に「スラ」の送假名のつくのが例である。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【豈足畏哉】 アニオソルルニタランヤ どうしておそれるに足らうか、おそれるには足らない。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「豈」は反語の辭で常に次の如き形をとる。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」の上に来る語に「スラ」の送假名のつくのが例である。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【豈足畏哉】 アニオソルルニタランヤ どうしておそれるに足らうか、おそれるには足らない。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「豈」は反語の辭で常に次の如き形をとる。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【改悟】 カイゴ 過をさとつて改めること。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【荷】 イヤシクモ かりそめにも。かりにも。

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

【矢丸且】 シグワンストラカツ

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

「且」は音「シヤ」。その上の意。「且」の場合には普通

【憚々】 ズキズキ びくびくとおそれるさま。詩秦風黃鳥に「臨其穴憚憚其慄」とあり、毛傳に「憚々懼也。」とある。

練習題

故事熟語

漢文初歩

一
○刻^レ舟^ニ求^ル劍^ヲ 楚人有^ニ涉^ル江^者。其劍自^ニ舟中^ニ墜^リ于水^ニ。遽^ニ契^ニ其舟^曰、「是吾劍所^ニ從^ニ墜^ニ也。」舟止^リ從^ニ其所^ニ刻^レ處^ニ入^レ水^ニ求^ル之^ヲ。舟已行^矣。而劍不行[。]求^レ劍如^レ此[。]不^ニ亦惑^ニ乎[。]（呂氏春秋）

註

呂氏春秋（二十六卷。秦時代の呂不韋の著だといふ書。）

刻^レ舟^ニ求^ル劍^ヲ（右の故事により時勢の推移を知らず舊慣を頑固に守ることの意となる。）

二

○吳^下阿蒙 孫權將^ル呂蒙、初不^レ學[。]權勸^レ蒙讀^ル書[。]魯肅後與^レ蒙論議[。]大驚^曰、「卿非^ニ復^ニ吳^下阿蒙[。]」蒙曰、「士別^ニ三日[。]即當^ニ刮^レ目^ニ相待[。]」（十八史略）

註

十八史略（元の曾先之の撰。史記・前漢書・後漢書以下宋鑑に至る十八史を摘録して初學者の讀本とした書。）
阿蒙（アモウ 子供。）

吳^下阿蒙（右の故事により一向進歩のない昔のままの人物をいふ。）

三

○朝三暮四 宋有^ニ狙^公者[。]愛^レ狙^養之^ヲ、成^レ羣[。]能^ク解^ニ狙^之意[。]狙亦得^ニ公^之意[。]損^ニ其家口^ハ、充^ニ狙^之欲[。]俄^ニ而^レ贖焉[。]將^レ限^ニ其食[。]恐^ニ衆^狙之^不馴[。]於^ニ己^ニ也[。]先^ニ誑^レ之^曰、「與^ニ汝^芋。」朝三暮四[。]足^乎。衆狙皆起^而怒[。]俄^ニ而^レ曰^{、「}與^ニ汝^芋。」朝四暮三[。]足^乎。衆狙皆伏^而喜[。]（列子）

註

列子（八篇。列禦寇の著といふ。老子の虛無思想にもとづく學說をのべた書。）

狙（音ソ ざる。）

損（ヘラス。）

誑（アザムク。）

芋（どんぐり。）

朝三暮四（右の故事により詐術を用ひて人を愚弄するをいふ。）

五 稻葉一徹

大槻 盤 溪

要 旨

稻葉一徹が刀俎魚肉の際よく従容として萬死を免れた所以のものは、實にその文學に心得のあつたが爲なる事を知らしめて、以て文武兩道を兼ね備ふることの重要さを悟らしめ、兼ねて上・中・下等の稍、複雑なる韻讀法に習熟せしめる。

解 說

【作者】 大槻盤溪 前課参照

【出典】 近古史談 織篇第一「稻葉一徹」の一文をそのま

釋 義

ま採録した。

【稻葉伊豫守一徹】 イナバイヨノカミイツテツ 初名良通 後長通と改めた。一徹(又一鐵に作る)は號である。本越智氏、伊勢國河野氏より出た。祖父通貞が美濃國に移り姓を稻葉と改め、守護土岐氏に從屬した。人となり豪強にして勇武絶倫、幼時その家の没落に遭つて寺に入り、十七歳還俗して伊豫守と稱し、驍名を馳せた。信長に從つて戦功を積み、後秀吉に仕へて三位法印に叙せられた。

天正十六年十一月歿。享年七十四。
本課の逸話は戰國武士に珍しい美談として廣く巷間に傳へられてゐるものである。
【服從】 フクジュウ 服し従ふこと。禮記「明君在^レ上、則^レ諸臣服從。」
【織田氏】 オダシ 織田信長。織田氏は平氏の後だといふ。斯波氏の重臣として代々尾張に居り信長の父信秀から漸

く強大となつた。信長二十七歳の時、今川義元の大軍を桶狭間に奇襲し、一戦してこれを破り武名頓に揚つた。後三河の徳川家康と結び、北美濃の齋藤氏を滅して居城を美濃に移した。時に正親町天皇威名を聞し召し、勅使を派して御料所の回復を命ぜらるゝや、永祿十一年信長は前將軍足利義輝の弟義昭を奉じて入京、義昭は將軍に任ぜられた。これより京都の警備につとめ、御所を修理し、御料を奉り、朝廷の儀式を興すなど勤王の事が多かつた。ついで伊勢に北畠氏を滅し、朝倉義景・淺井長政の聯合軍を姉川に破つて威名日に加つた。將軍義昭はこれを嫉んで武田氏・毛利氏と結んで信長を除かんと企て、却つて信長の爲に逐はれ、天正元年此處に室町幕府は滅亡した。この年淺井・朝倉の二氏を亡して近江の地を併せ、四年安土に規模宏大な居城を構築した。後家康と共に武田信玄上洛の大軍を三方ヶ原に破り、ついでその子勝頼を長篠の一戦に大破し、遂に天正十年甲斐に侵入してこれを亡した。既にして上杉謙信は上洛に先だつて病死し、中國の毛利氏ひとり勢を持って信長に抗した。ここに於て羽柴秀吉を遣して中國に毛利氏を攻めさせ、天正十年備中の高松城の水攻に、秀吉の毛利輝元の大軍と對陣するに當つてこれを援けんとして出發し、京都本能寺でその將明智光秀に襲はれて戦死した。享年四十九。

別格官幣社建勳神社(山城國愛宕郡大宮村)にまつられ、大正六年正一位を追贈された。
【未^ニ釋然^一也】 イマダシヤクゼンタラザルナリ まだすつかり疑が晴れない。再讀文字「未」(モウ)の例。
【釋然】は心のうちとけるさま。からりと疑の解けるさま。
【茗^ニ謙^一】 メイエン 茶の湯の會。
【茗^ニは王篇に「茶芽也」と。「謙」は「醜」に作り「宴」に同じ。
【延^ク】 ヒク 案内する。
【竊^ニ】 ヒソカニ 人知れず。こつそりと。
【託^ニ伴接^一】 バンセツニタクシ 接待にこそよせて。相伴にかこつけて。
【伴接】は、「接待」とも熟し、もてなすこと。應接すること。相伴(シヤウバン)に同じ。
【圖^レ之^一】 コレヲハカル 一徹を殺さうとたくらむ。
【竊^ニ使^一其臣三人 託^ニ伴接^一以圖^レ之^一】 一は使役の形の練習であり、一は上下の符號を用ひた複雑な韻讀法の例である。形式上重要な箇所であるから十分慎重に取扱はるべきであらう。
【從容】 ショウウヨウ (一)ゆつたりとしたさま。くつろぎ落ちついたさま。中庸「從容中^ニ道^一聖人也。」(二)ひさしい意。禮記學記篇「待^ニ其從容^一、然後盡^ニ其聲^一。」(三)勤め

誘ふこと。「愆愆」に通ずる。史記衡山王傳「夙夜從容」
ここは(一)の意。

【朗誦】 ラウシヨウ 聲ほがらかによむ。

「誦」は、ふしをつけて讀む。

【壁間】 ヘキカン ここは「床の間」のこと。

【掛】 カク 音「ケイ」「掛」に同じく、物をつりさげる意。

【横秦嶺】 シンレイニヨコタハリテ 秦嶺にたなびい

て。「秦嶺」は支那陝西省西安府の咸寧・藍田の二縣の境
にある山。

【家安在】 イヘイヅクニカアル なつかしき家もどの方角

かわからない。安(イヅク)の訓に注意。

【擁藍關】 ランクワンヲヨウシテ 藍關をふりうづめて

「擁」は、ここは「塞」に通じ、おほふ・ふさぐなどの意。

【藍關】は「藍田關」秦嶺の西北にあり、西安府藍田縣より

商州に入る道を扼する關所。

【不前】 ススマズ 前進しない。

【雲横秦嶺家安在。雪擁藍關馬不前】

唐の韓愈が憲宗皇帝の朝、「論佛骨表」を上つて潮州の

刺史に貶せられる途上に賦した作中の一部。全詩は、

一封朝奏九重天、夕貶潮州路八千、欲為聖明除弊事、肯將衰朽惜殘年、(雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前)知汝遠來應有意、好收我骨瘴江邊。

これを通釋すれば

朝に佛骨を論ずるの表を朝廷に上つた所、皇帝の怒に
觸れて、夕にははやく遠く八千里の僻地潮州に流される
身となつた。これも天子の御爲に、わるい事を取り除
かんと思つた事、もとより君に捧げた身命である
から老い朽ちた身を以て残り少い餘生など決して惜
しいとは思はない。(さりながら秦嶺には雲がたなびい
て、顧みてもなつかしい我が家の方もさだかにわか
らず、また行く手の藍關は雪に降りうづめられて馬は進
まない。實に感慨無量なるものがある。)さて汝(韓愈
に属した姪を指す)がはるばる我に従つて來たのは
定めし考のある事であらう。若し衰朽せる自分が潮州
で死んだならば、その骨を瘴江のほとりに埋めてくれ
よ。

【就問】 ツキテトフ そば近くよつて行つて問ふ。

【分解】 ブンカイ 一語一句にこまかく分けて解釋するこ
と。

【說其典故】 ソノテンヲトク その詩の作られた故事來歴
を説明する。

「典」は「典故」の意で、ここでは詩の作られた事情、作者
の境遇などを指す。

【傾聽】 ケイチャウ 耳を傾けて聴くこと。

「裏」は、もと衣服の内がは。轉じてすべて物の内面をい
ふ。

【僕】 ボク 自稱代名詞謙稱。われ。私。

【期】 キス 覺悟する。豫期す。

【徒死】 トシ 徒に死ぬこと。いぬじに。

【寧靜子】 ネイセイシ 作者黎溪の別號。

【刀俎魚肉之際】 タウソギヨクノサイ 非常に危険な場
合。

「刀俎魚肉」は、庖丁の置かれたまな板の上の魚肉の意で
極めて危険な状態を譬へる語。史記、項羽記「如今人方
爲刀俎、我爲魚肉」

【萬死】 マンシ 萬が萬まで死ぬべき危い場合。到底命の
助からない危険な際。史記、張耳陳餘傳「出、萬死不顧一
生之計」

【解文字】 モンジヲカイス (一)文字の意味がわかる。
(二)轉じて學問がある。ここは(二)の意。

【演說】 エンゼツ (一)意義をのべひろめて説くこと。
(二)公衆の面前で主義主張意見等を述べること。ここは
(一)の意で、初め一々分解し、更に句意に及び、併せて
典故を説くといふ風にのべひろめて説明したのである。
【以其善解文字演說古人之詩耳】 上・中・下を以て
顧讀する一層複雑な形である。「竊使其臣三人」及び

【忽然】 コツゼン たちまちに。急に。俄かに。忽焉・忽
爾に同じ。

【乃】 スナハチ 然るに。反對に。

【文學】 ブンガク (一)學問の總稱。學藝を併せいふ。史
記、灌大夫傳「不喜文學、好任俠」(二)詩文小説等
所謂純粹文學に關するもの。ここは(一)の意。

【猜疑】 サイギ うたがふこと。

「猜」は、「(一)恨賊也、(二)疑也、(三)懼也」と註す。こ
こは(二)うたがふ意。

【頓】 トミニ 急に。にはかに。

【頓首】 トンシュ 拜して頭が地につくこと。頭が地につ
くまで腰を低くまげて拜禮すること。

【謝】 シヤス ここは「感謝する」意。猜疑の心を晴らし
てくれたのを謝したのである。

【匕首】 ヒシユ 短刀。あひくち。通俗文に「劍屬、其頭
類レ匕、短而便用、故曰匕首」とある。匕は匙である。

説苑に「尺八短劍頭似レ匕」とあり、史記の吳世家に「專
諸置匕首于炙魚中以進食」と見えてゐる。

【命三人……示之】 使役を表す語がなく送假名によつ
てこれを表す形。「命ジテ……セシム」の練習である。(三
鎌信義勇參照)

【袖裏】 シウリ たもとのなか。

「知其有文學」に於ける上下の顛讀形式と併せ較べなどして、理解を明確にすべきであらう。

【信乎】 シンナルカナ まちがひない事ですよ。
「乎」を「カナ」(咏歎)と訓む例。尙「乎」には疑問・反語等の意を示す「カ」又は「ヤ」の訓讀のある事に注意。

【武備】 ブビ 軍事上のそなへ。兵備。

【文事】 ブンジ 學問上のことがら。書經傳「武功成、文事修」

【寧靜子曰嗚呼云々】 以下の文はこれを論贊と名づける。「論贊」とは、史傳の記述の末に加へられた作者自らの論評のことである。「史記」には「太史公曰」と稱し、班固の「漢書」は「贊」と書し、荀悅の「漢紀」には「論」といひ、その他、評議・詮述等名稱は種々異なるが、すべてこれを論贊と稱する。盤溪は史記の體にならつてゐるのである。

指導上の注意

(一) 作意の存する所は論贊にみて自ら明瞭である。「有武備者、必不可無文字也」とは、誠に古今東西に互る至言といふべきであらう。これが作意の存する所を察して、問學の根本は、實に心・身をかねたる鍊磨修養にある事を深く悟らしむべきであらう。

(二) 形式的には、上・下、又は上・中・下の符號による顛讀法の習熟に資すべき教材である。此處に至れば漢文も愈々複雑度を加へて、初學者には相當學習の困難さを感じしめるであらう。特に理窟を廢して多くの練習題等を課し、反復練習の間に自ら會得せしめるやうな取扱ひが特に要求せられる所である。

練習題

一 豐太閣豪語

豐太閣將^ト伐^シ朝鮮^ヲ、發^ス京師^ヲ。或^ト曰^ク、^{以下善漢文者上從}盍^ハ善^ク漢文^ヲ者^上從^ム。太閣笑^ヒ曰^ク、吾^ガ此行^ハ、將^シ使^シ彼^レ用^フ我^ガ文^ヲ耳^ト。(日本外史)

註

日本外史(三)「謙信義勇」出典欄参照)

京師(ケイシ) 京都をいふ。「京」は大、「師」は衆、大衆の居る處の義より、天子の在す都の意となる。或(アルヒト)「ヒト」と送ることに注意。

二 莫如擇交

昆弟親戚固^ニ當^ラ不^レ論^ニ賢愚^ヲ而厚^ク之^ニ。其他莫^シ如^ク擇^ル交^ヲ。無^レ事則資^ニ其^ノ切磋^ニ、可^ク以^テ進^ム德^ヲ、有^レ事則藉^ニ其^ノ謀慮^ヲ、可^ク以^テ成^ス功^ヲ。乃^チ我^ガ友^也。

註

廣瀬建(字は子基、通稱は求馬、淡窓と號す。豊後國日田の人。龜井元鳳に學び、學成りて家塾を其の郷に開く。從遊する者、前後四千餘人に及んだといふ。規約を嚴にし課程を密にして多く人材を出した。安政二年歿。享年六十四。)

擇^ル交(交友を擇ぶ。)

昆弟(兄弟。)

當^レ厚^ク之(これに對して人情を深くしなくてはならない。)

切磋(道德學問をみがくこと。)

成^ス功(仕事を成就する。)

我^ガ友^也(我が友とすべき人である。)

三 人行有長短

漢文初歩

世 範

三九七

人之性行、雖有所短、必有所長。與人交遊、若常見其短、而不見其長、則時日不可同處。若常念其長、而不願其短、雖終身與之交遊可也。

註

世範（三卷、宋の袁采の著。陸親・處己・治家の三門に分ち、立身處世の道を説いた書。）

時日（一日一時も。）

處（ヲル くらす。）

六 羽柴氏神速

大槻 盤 溪

要 旨

神速よく敵の意表を衝き、機略よく敵の氣勢を挫いて大捷を博した秀吉の挿話である。この神速機略あつて而も自ら知る事の深きを思へば、彼が大成の寔に故ありしを知るに足るであらう。作者はこれをその論贊に次の如く評してゐる。
寧靜子曰、盛政剛強自用、適足以喪師誤國。而羽柴氏之決勝千里、炳若觀火。然則不知張子房云者、乃其所自知也歟。

解 說

た全文を採録した。

【作者】 大槻盤溪 前課参照

【出典】 近古史談 豊篇第二「羽柴氏神速」の論贊を除く

釋 義

【羽柴氏】 ハシバシ 豊臣秀吉。天文五年尾張國愛知郡中村の一農家に生まれた。遠江に浪々して今川氏の被官松下氏に仕へたが志を得ず、去つて織田信長に仕へ、木下藤吉郎と名乗つて賤役に従つた。爾來精勤して次第に擧

用され、遂に信長の謀將として重きをなし殊功を重ねた。天正五年中國征伐の主將となり、此の間羽柴秀吉と改稱した。十年、本能寺の變に遭ふや直ちに毛利氏と和し、長驅して歸り、山崎の一戦に明智光秀を斃して主家の仇

を報じ、翌年柴田勝家・織田信孝の黨を滅して、名實共に信長の後繼者となり、大阪城に據つて天下に號令した。以來北國を略し、紀伊を伐ち、四國を平定し、十三年、内大臣を経て關白となり、十四年太政大臣に昇り、豊臣の姓を賜つた。十五年九州の島津氏を降し、十八年小田原に北條氏を滅し奥羽を平けて、ここに全く天下統一の霸業を完成した。翌年關白職を甥秀次に譲り太閤となつた。文祿元年以來二回に互つて征韓の師を起したが、功半にして慶長三年八月大阪に薨じた。享年六十三。

進んで賤ヶ嶽に逼らんとした。秀吉は直ちに軍をかへして明日曉方から攻めて、これを潰敗せしめた。(本課はこの時のこと)盛政の軍は敗走して勝家の陣になだれかかり、盛政は捕へられ、勝家は苦戦の後逃れて北庄に落ち、同月二十三日秀吉に攻められて自盡した。賤ヶ嶽は滋賀縣伊香郡にある山。余吾湖を北に琵琶湖を南にひかへ、その中間にある。標高四二・三米。

【神速】 シンソク 非常に速かなこと。不思議なほど迅速なこと。

【越將】 エツシヤウ 越前の將、作間盛政は越前國主柴田勝家の將であつた。

【賤ヶ嶽戰】 シヅガタケノタカヒ 本課は賤ヶ嶽合戦中の一挿話であるから、先づ戰の概略を説明して置く。

【作間盛政】 サクマモリマサ 「佐久間盛政」と書く。尾張國の人。字は修理、玄蕃允といふ。柴田勝家の甥に當る。驍勇を以て鳴り、世に鬼玄蕃と稱する。初め織田信長に仕へたが、伯父信盛が信長に罪せられてからこれを憚り、暫く出仕しなかつた。後、赦されて柴田勝家に仕へ、天正十一年、秀吉・勝家の決戰に賤ヶ嶽の北柳瀬に秀吉の部將中川清秀を敗り、勝に倣つて秀吉の敗る所となり、捕へられて斬られた。享年三十。

【大垣】 オホガキ 今の岐阜縣大垣市。市の中央に位する大垣城は、天文四年始めて足利義昭將軍のきづく所といふ。後織田氏の一城となり、當時柴田勝家と相結んで織田信孝がここに籠つた。秀吉は此の時方にこれを攻めてゐたのである。

【中川清秀】 ナカガハキヨヒデ 攝津茨木の城主。瀬兵衛と稱した。驍勇の名高く、初め荒木村重に從屬してゐたが、主家滅亡の後織田信長に仕へ、忠勤をはげんで武功を重ね、信長歿後秀吉に従ひ、秀吉に先驅して山崎に戦ひ、賤ヶ嶽の戰に大岩山に於て佐久間盛政に急襲されて

戰死した。享年四十二。

【傲然】 ガウゼン おごりたかぶるさま。

【致書】 ショライタス 手紙をやる。書面を送る。

【柳瀬敗報】 ヤナガセノハイハウ 柳瀬で味方の敗北したしらせ。前記中川清秀の敗北を指す。

【馳人】 ヒトヲハス 人をはしらせる。急ぎ使者を遣はす。

【柳瀬】 現滋賀縣伊香郡片岡村大字柳瀬。越前・近江の道路を扼する要害。先に信長は朝倉義景をここにうち、今度賤ヶ嶽の戰に、勝家はその中打尾山に陣所をしき、近く大岩山に中川清秀これに對した。

【何來之速】 ナンゾキタルコトノスマヤカナルヤ なんと速く來たことであらう。

【抵掌】 タナゴコロヲウツ 手をうつ。勢よく掌をうち合せる。

【天明】 テンメイ あげがた。夜明け。

【大捷】 タイセフ 大勝利。「捷」は、軍にかつたの意。

【答書】 タフシヨ 返事の手紙。返書。

【歩騎】 ホキ 歩兵騎兵。

【言當自我發】 ゲンマサニワレヨリハツスベシ 私の方から御挨拶するのが當然であつた。

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【當】 當は「……するのが當然である。……すべき筈だ。」(再讀文字)

【日暮】 ニチボ 夕ぐれ。夕方。

【自】 は、三・謙信義勇(一七五頁三行)参照。

【賤ヶ嶽址】 シヅガタケノシ 賤ヶ嶽の城あと。

【乃】 スナハチ 反つて。然るに。

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【爲公所先耶】 コウノサキンズルトコロトナルカ あなたに先んじられたことは恐縮です。

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【爲……所】 所による受身の形(一七四頁一行参照)

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【耶】 は、「ヤ・カ」と訓じ、疑問・反語の意を表す。ここは軽い疑問。

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【明旦】 ミヤウタン 明朝。

【及於中途】 チュウトニオヨブ 途中でやつと追いついた。

【明旦】 ミヤウタン 明朝。

【領命】メイフリヤウス 御仰せを承知する。

「領」は、うけがふ・承知する・さとする等の意。

【冷笑】レイセウ あざわらふこと。さげすみ笑ふこと。

【異域】イキキ 外國。異國。後漢書・班超傳「立功異域」以取封侯。ここは勿論支那(漢)を指す。

【張子房】チャウシバウ 名は良、字は子房。世々韓の相たるの家に生まれた。韓が秦に滅ぼされた時、張良は私財を散じて同志を集め、力士の香を求め得て、鐵槌を以て始皇帝を博浪沙に狙撃したが果さなかつた。帝の追及を逃れ、姓名を變じて汜上に遊んだ時、黄石公から太公望の兵書「三略」を授けられたと傳へられてゐる。漢の高祖の擧兵を聞いてこれに従ひ、韓信・蕭何と並んで三傑と稱せられ、常に帷幄に參じて獻替縱横、遂に項羽を滅して天下一統の業を遂げしめた。高祖の即位するに及び、功を以て留侯に封ぜられたが、後辭して閉居し、黃帝六年に死歿。文成と諡せられた。

指導上の注意

- (一) 要旨欄所載の論贊を提示し、或はまたこれを補材として課しなどする事によつて、作者の本文を草した意圖を知らしめ、後世偉人と仰がれる人の生涯を顧みる時、必ずや然る所以のものの存する事を悟らしめたい。
- (二) 形式上新しい箇所はないかほりに、既習事項はすべて備へて居る。反復熟讀して漢文諸法式に習熟せしめるやう取扱はれたる。

練習題

一 壯哉平八

忠勝善用槍。所愛一槍、名曰截蜻蛉。長湫役、兩軍相距數百步、竝隊而馳。忠勝戴鹿角冑、提截蜻蛉、下鞍飲馬於河。豐太閤望見、曰、「嗚呼、壯哉、平八。以我三萬、擊彼五百、猶石壓卵。粉碎不回踵。而從容飲馬以示餘暇。何其壯也。」嘆嗟久之。

註

長湫(愛知縣愛知郡に在り、天正十二年徳川家康豊臣秀吉を此に破る。)

飲馬(馬に水をのませる。)

不回踵(踵を後に引きかへす間もなき程僅かの間。)

從容(シヨウヨウ ユツたりとおちついてゐるさま。)

餘暇(ゆとり。餘裕。)

嘆嗟(感に打たれ大息すること。)

二 重治談軍事

竹中重治、精通兵法、爲豐太閤所重。一日、集僚佐談軍事。其子左京尙少、在坐。遽起而出。重治曰、「汝何之。」對曰、「欲瀕瀕。」重治曰、「寧坐瀕。」武人論兵、豈有談未終而起者乎。」(日本智囊)

註

中村和

中村和（字は子藏、栗岡と號す。豊前中津の人。學を帆足愚亭に受け、近江水口藩に仕へて儒員となつた。明治維新の際に功があり十四年四月歿。年七十六。著書に孝經翼、栗岡詩文集、日本智囊、栗岡餘稿等がある。）

日本智囊（六卷、明の馮夢龍の「智囊」に倣つて我が國賢臣名士の智略に關係ある事蹟を輯録した書。）

竹中重治（通稱半兵衛、深沈にして智略に富み、秀吉に仕へて武功をたてた。天正七年六月歿。享年三十六。）

僚佐（屬僚。したやく。）

少（ワカク又はヲサナクとよむ。）

之（ユク 何處へ行くと目指すところありて行く意。）

溺（小便 音「ネウ」 「オボル」と訓ずるときは音「デキ」）

爲（豊太閤所重（「爲……所」の形の練習。）

豈有未終而起者乎（「豈……乎」の形の指導練習。）

三 龜井琉球守

木内 倫

龜井茲矩從_レ豊太閤、有_レ軍功。公將_レ與_レ因幡半。茲矩謝曰、「殿下欲_レ錄_レ臣功、不_レ必神州地也。若被_レ賜_レ琉球、幸莫_レ大焉。」公喜_レ其壯膽、索_レ筆親題_レ所_レ執扇、曰「龜井琉球守、以_レ與_レ之。茲矩乃修_レ戰艦、蓄_レ糧食、航_レ海南征_レ遇_レ颶。後更謀_レ再舉_レ會_レ朝鮮、役起而止。（擊攘集）

註

木内倫（龍山と號す。讃岐の人。慶應三年歿。享年五十八。）

擊攘集（四卷、織田・豊臣・徳川三代の君臣の言行を記した書。）

龜井茲矩（カメキコレノリ 因幡鹿野の城主。もと尼子氏に屬したが、尼子氏の亡後秀吉に屬した。慶長十七年正月歿。享年五十六。）

錄_レ功（てがらを賞する。「錄」は功簿に登録すること、因つて功を賞する意に用ひる。）

不_レ必神州地也（必ずしも日本の地には限らない。「必」の字の上に打消の字（不、弗等）あるときは「必ズシモ」と讀むべき事を注意し、生徒をして「必不」、「不必」の別を銘記せしむる。）

琉球（昔時此の地は琉球王の統治した獨立國で、奈良朝時代に屢々來貢して全く我が國の屬國となつたが、其の後王政の衰ふるに及び、一時明朝に従ひ其の封冊を受けた。徳川時代に及び、慶長十五年、島津氏をして之を征服せしめ、遂に明治維新に及び、維新後、王を封じて藩主となし華族に列し、明治十二年、藩を廢して沖繩縣を置く。）

壯膽（意氣壯にして膽力の大きなこと。）

題（かきつける。）

漂蕩（ヘウタウ ただよひながれる。「蕩」は搖動なり。）

七 千 利 休

大 槻 盤 溪

要 旨

千家流の始祖として日本茶道を大成した利休の、奇才よくその師紹鷗を感服せしめた天才的な人となり記した文である。内容的には風雅の妙諦を悟らしめ、形式的には漢文既習事項の練習に資すべき教材である。

解 説

【作者】 前課参照

【出典】 近古史談 豊篇第二の「關白誅利休」の「附記」

釋 義

【千利休】 センリキウ 千家流茶道の始祖。名は宗易。俗稱與四郎。拋筌齋利休居士と號し、千家と稱した。室町幕府の同胞千阿彌の孫に當る。紹鷗に茶道を學び亭子の法を傳授され、これを小間に移して茶道を大成した。初め織田信長に仕へ、後豊臣秀吉に寵遇せられたので、諸侯その門に教を乞ふものが多く、茶道興隆の因となつた。大林和尚に參禪し、天文十四年受戒、天正十三年正

の一文をそのまま採録したものである。

親町天皇より利休居士の號を賜うた。同十五年秋北野に大茶湯の催があつた。晩年西芳寺に隱棲、天正十九年紫野山門の上に己の木像を置いた爲に、秀吉の怒にふれて割腹自盡した。享年七十一。門弟が多く、各一派をたてて後世に傳はつた。南坊宗敬(南坊流)織田長益(有樂流)細川忠興(三齋流)藪内紹知(藪内流)圓乗坊宗圓(圓乗流)等が殊に名高い。

【茶儀】 チャギ・サギ 茶の湯の儀式・作法。形よりすれば茶の湯の儀法であるが、精神の上よりいへば即ち茶道である。「茶道」と解してもよからう。

【左海】 サカイ 大阪府堺市。大阪市の南に接する工業市として榮えてゐる。

【紹鷗】 ゼウオウ 茶道の先哲。一間居士又は大黒庵と號す。泉州堺の人。武野氏。京に出でて珠光の門人宗陳・宗悟に茶道を學び、また普遍國師について參禪し、和歌をよくし、右大臣藤原公頼に従學すること十數年、因幡守に敘せられた。後辭して堺にかへり、専ら茶を嗜んで業とし、珠光について宗匠となり、一家をなし、これを千利休に傳へた。弘治元年歿。享年五十二。

【斯道】 シダウ (一)仁義の道。儒道。論語雍也篇「子曰誰能出不由戸。何莫由斯道也。」(二)轉じて、各自がその奉ずる道、又は技藝。ここは(二)の意で、茶道を指す。

【盧陸】 ロリク 盧同と陸羽。共に唐の茶人。

「盧同」は玉川子と號し、茶を嗜み茶歌をつくる。

「陸羽」字は鴻漸、茶事に精しく、茶經三卷を著す。

「斯道之盧陸也」は、茶道に於て盧同・陸羽にならべらるべき巨匠であつたの意。

【掃除】 サウチヨ はき清めること。さうち。

俗に「サウチ」と讀むが「除」にはもと「チ」の音はなく、古く國語で、大臣以外の臣下の任官進級の公事を「ちもく」と呼び、「除目」の字を當ててゐるので、その「除」(チ)を轉用した讀み方である。

【命掃(除)庭中】 使・令等の使役文字を用ひず、送假名を以て使役の文を構成する形である。此の場合には必ず命令的言辭が先行する事に注意させたい。即ち命ジテ・令シテ・遣シテ・遣リテ等の語が先行する文にあつては、使・命・遣等の文字が使はれて居らなくとも普通使役の文となるのである。

【諾】 ダクス 承諾する。承知する。うべなふ。うけひく。【茶亭】 チャテイ・サテイ 茶室造りの建物。所謂「數寄屋」であらう。「數寄屋」は、母屋から離れて別棟に建てられた茶室造りで、水屋・茶席・廣間等のその中に備つた建物をいふ。

【帚痕】 サウコン 帚のあと。ほうき目。

「帚」は正音「シウ」通音「サウ」。帚の正字。

「帚痕如拭」は、ふきとつたやうに清らかに掃いてある。

【織塵】 センチン 小さな塵。「織」は小さい・細かいの意。

【林樹】 リンジュ 木の樹木。

【瀟灑】 セウサイ・セウシヤ 「瀟灑」とも書く。さつぱりとして清らかなこと。

「瀧」はきよらかなこと。「瀧」はまた「酒」に作り、水水をまきそそいださま。さつぱりと清々しいこと。

【青翠】 セイスキ 青々とした緑。

「翠」は、みどり色。もえぎ色。

【躊躇】 チウチヨ ためらふこと。たちもとほること。

【無復下手處】 マタテヲクダストコロナシ 此の上手をつける場所がない。「無復——」の形は四・岩間大藏参照。

【竟】 ツヒニ あげくのはてに。

「ツヒニ」と訓する文字の異義を示す。

【遂】 スイ 「因也、兩事相因而及也」と註す。「とう」と訓す。事をしとげるの意。韓非子「蟻壤一寸而復有水。乃掘地遂得水。」

「竟」音 キヤウ 「あげくのはてに」とす。史記「及破ニ驪戎、獲驪姫愛之、竟以亂晉。」

【卒】 ソツ 終盡の意。「はては」と譯す。

【畢】 ヒツ ことごとくの義。十が十みなすみ盡くした意に用ひる。

【終】 シユウ 終極の意。「しまひに」と譯す。

【墜葉】 ツキエフ 落葉。

【片々】 ヘンペン かるくひるがへるさま。

【點地】 チニテンズ 點々と地に散りしく。

【風趣】 フウシュ オもむぎ。風致。

【了命】 メイヲレウス 命令された事ををはる。

「了」は、すます。をはる等の意。

【奇才】 キサイ すぐれた才氣。世に稀な氣ばたらき。

【傾秘訣】 ヒケツヲカタク 奥義をだしたくし。

「秘訣」は、事をなすに最も効が多く、而も秘密にして人に知らさない法。秘密の法。おくの手。奥義。「秘」は「祕」の俗字。

「傾」は、ここでは「ありたけを盡くす」意。

【授焉】 コレニサツク 利休に傳授した。

「焉」は、ここは代名詞、「是」に同じ。尙焉は屢、用ひられて而も異訓の多い文字であるから、次にこれを示して置く。

(一) 語の已む詞。又語調を整へる詞。(この場合發音しない。) 易坤卦「故稱龍焉」論語陽貨篇「四時行焉、百物生焉。」

(二) 「イツクンゾ・ナンゾ・イカンゾ」と讀む場合。論語公冶長篇「魯無君子者、斯焉取斯。」

(三) 「コレヨリ」と訓む場合。罪莫大焉。

(四) 「コレ」(代名詞)と訓む場合。

【宗匠】 ソウシヤウ 和歌・連歌・俳句・茶道などの師匠。

指導上の注意

「命ジテ……セシム」の他特別注意すべき新形式もなく、極めて素直な教材である。専ら反復朗讀して漢文習熟に資すべき課である。のみならず比較的短い教材であるから、暗誦せしめるは勿論、要所々々は教科書をはなれて書寫し得る位にまで徹底的に取扱ひたい。

練習題

一 不負爲三神州之民

恭惟、上古、天祖肇基、忠孝之訓、本三諸神器、寶祚之隆、與三天壤、無窮。其冠絕於宇內者、固無待論說也。然則讀我國史者、深思反省、仰奉天祖之光訓、俯探萬國之所長、變通神化、使大倫益明、國體益尊、實可謂不負爲三神州之民者也。

註

寺門謹(舊水戸藩士。東湖と同じ頃の人。)

光訓(立派なをしへ。)

大倫(大義といふに同じ。)

二 義家學兵法

源義家、頼義子也。稱八幡太郎。材武善射。從父討安倍貞任、夷之。普過藤原頼通第、談陸奥戰爭。博士大江匡房在別室。聞之曰、「好男子、惜未レ知兵法。」從者微聞之、慍告義家。義家曰、「其或然。」見匡房出、禮之。

漢文初歩

頼 襄

遂就學焉。後三年役、攻金澤柵、去柵數里、望見雁行亂、曰、「是有伏也。」縱兵搜索。果獲之。謂衆曰、「兵法言、「鳥亂者伏也。」我不學則殆矣。」

註

材武（ザイブ）材幹があつて勇武なること。

安倍貞任（アベノサダタウ）天喜四年、父頼時と共に陸奥を押領して朝命に従はず。鎮守府將軍源頼義の來攻に遇ひ、鳥海に迎へ戦つて之を破り、勢威いよいよ振ふ。康平五年、頼義清原武則等と來り攻むるにあひ、厨川の柵に破れて戦死した。享年四十四。

藤原頼通（關白道長の子、後一條天皇の時、父に代つて政を攝し、關白となる。承保元年歿。享年八十三。）

大江匡房（オホエマサフサ）式部大輔匡衡の曾孫。八歳にして史記・漢書に通じ、十二歳にして、詩を賦し、神童と稱された。長じて博識強記、朝典に精通し、著書に江家次第二十一卷がある。天永二年歿。享年七十一。

好男子（立派なる男子）

慍（イキドホル）むつとする。憤と略々同じ。

其或然（さうかもしれぬ）

金澤柵 羽後國仙北郡金澤村に柵の址がある。「柵」は説文に「編樹木也」とあつて、外敵を防ぐ籬をいふ。

塵（ミナゴロシニス）

伏（フク）伏兵。

鳥亂者伏也（孫子行軍篇に「鳥起者伏也」とある）

殆（アヤフシ）と訓ず。危なり。

三 義光赴兄急

義家弟義光、稱新羅三郎。亦勇智多技能。是時爲右兵衛尉、在京師。聞兄軍不利、赴援。義光素好音嘗學

筮於豐原時元。是時、時元已死、其孤子時秋、送義光、至足柄山。會月明。義光因吹筮盡投所學訣別、遂至陸奥。義家喜泣曰、吾見汝、猶見先君也。乃與俱進攻。

註

義光（頼義の第三子、義家の弟。新羅三郎と稱す。人となり勇敢にして智略あり、騎射を善くし、又音樂を好む。兄義家の清原武衡を陸奥に伐つに及び、之を援けんと欲し、出征を朝に請うて許されず、遂に官を辭して之に赴き、力を協せて金澤の柵を攻め之を陥れた。）

右兵衛尉（ウヒヤウエノジョウ）兵衛府の官名、督、佐の次官、即第三官。

豐原時元（時光の第四子。筮の名手）

時秋（時元の子、筮を以て朝に仕へ、鳥羽天皇の朝、雅樂大夫、樂所別當となり、鴨河天皇の時、選ばれて筮の御師範となつた。）足柄山（相模、駿河の界にある山嶺。此所に關所を設けたが、延暦年間富士山が噴火して通路を塞いだので、別に箱根路を開いて通路とした。後足柄をも舊に復し二路ともに行はれた。）

先君（亡き父。頼義を指していふ）

八 清正讀論語

大槻盤溪

要旨

清正が論語を學んで時事に會し、深く感激する所のあつた事を知らしめ、その然る所以のものは、實に旅次すら且卷を釋かぬ勉學の結果たる事に思を致さしめ、更に進んで聖賢の書は頑味熟讀して、以て道を究むべきものたる事を悟らしめる。形式的には本學年の最後の教材として、練習題等をも課し、來るべき準備の爲十分に漢文の諸形式に習熟せしめる。

解説

【作者】 大槻盤溪 前課參照

【出典】 近古史談 豊篇第二「清正讀魯論」の論贊を除く他の全文を採録した。因みに本課の後に次の論贊が記されてゐる。

寧靜子曰、昔信玄讀論語、未卒數章而投地曰、是

頭痛之書。其自慚之深、可知矣。清正則異乎此。既以三不可奪之節、輔翼六尺之孤、尙且勉而不已。至三旅次、亦不釋卷。則其所遺語、豈唯得二兩句、喜者哉。

釋義

【加藤清正】 カトウキヨマサ 幼名夜叉若、後虎之助と言ひ、秀吉に臣事した。母が秀吉の母と従父姉妹であつた

と言ふ。賤ヶ嶽七本槍の一人として勇名を馳せ（小學國語讀本卷十一第七課參照）天正十三年主計頭、ついで肥

後半國二十五萬石を領した。文祿の役小西行長と共に先鋒として渡鮮、深く朝鮮の奥地に入つて二王子を捕へた。石田三成の讒によつて一度召還されたが、慶長二年再び渡鮮し、蔚山に籠城苦戦した。秀吉の薨後兵を班し、慶長五年石田三成の舉兵には徳川方に加擔し、役後肥後五十五萬石を食み、肥後守となり熊本城を築いた。十六年秀頼を奉じて家康と二條城に會見せしめ、歸國後熱病にかかつて卒した。享年五十。

【論語】 ロンゴ 原著には「魯論」とある。

論語は孟子・中庸・大學と共に四書の一。作者に就いては多くの異説があるが、孔子歿後、其の門人が、孔子生前の性行言説を輯めて論纂した書となす説が大體に於て肯定せられてゐる。漢時古論語・齊論語・魯論語の三種が存在したが、古論語・齊論語は佚亡して傳はらず、現在一般に行はれてゐるものは魯論語である。全卷「學而」以下二十篇に分れ、孔子の理想的道德觀・政教觀を窺ふに足るものたると共に、其の偉大な人格は燦として輝き、永く世道人心を導いてゐる。

【前田亞相】 マヘダアシヤウ 大納言前田利家。尾張荒子城主利昌の子。初め織田信長に仕へ、桶狭間の戦・越前の平定に功あり、初めて能登に封ぜられた。後秀吉に屬してその帷幄に參じ、關東奥羽の平定に功をたて、征韓

の役には肥前に赴き秀吉に代つて軍事を統監した。慶長中權大納言從二位に敘せられ、五大老の首席として秀吉の遺託を受けて秀頼を輔け、死に先立つて秀頼の扶養及び後事を徳川家康に託し、慶長四年閏三月歿した。享年六十二。從一位を追贈され、今別格官幣社尾山神社（金澤市西町）に祀られてゐる。

【亞相】は、大納言の異稱。宰相に亞ぐの意。

【晩年】 バンネン 老年。老後。

【手不釋卷】 テニクワンヲオカズ 書物を手から離さない。

「釋」は、おく、又はすてるの意。

【記】 キス 記憶する。おぼえてゐる。

ここは「自分の記憶する所によれば」の意。

【太閤】 タイカフ (一)古く攝政又は太政大臣の尊稱。

(二)後には關白を辭して尙内覽の宣旨を被つた人。(三)

又關白をその子に譲つた人の稱。特に豊臣秀吉の後は太

閤はその專稱の如く用ひられてゐる。勿論ここは豊臣秀

吉を指す。秀吉略傳は「六・羽柴神速」參照。

【薨】 コウズ みまかる。貴人の死をいふ。現今我が國で

は皇族、又は三位以上の人の死にいふ。

【太閤薨之年】 慶長三年。その年の八月秀吉は薨去した。

(六・羽柴氏略傳參照)

【招請】 セウセイ 人を招待すること。
 【浮田】 ウキタ 宇喜田とも書く。浮田秀家。直家の子。秀吉に養はれて厚遇され、從五位下侍從河内守に任じ、四國九州の征伐に從つて功あり、參議從三位に陞り、文祿の役總帥として渡鮮、ついで權中納言に任ぜられ、慶長二年監軍として再び朝鮮に渡つた。關ヶ原の役には西軍の總帥に推され、破れて薩摩に走り、島津氏により、ついで八丈島に流されて明暦元年十一月配所に歿した。享年八十三。

【淺野】 アサノ 淺野幸長。長政の長子。幼より秀吉に近侍し、十五歳小田原征伐に初陣して殊功をたてた。文祿の役渡鮮して武威を輝かし、和議なつて一旦歸國、慶長二年ふたたび渡鮮し、屢、明軍を破つた。關ヶ原の戦には家康に從ひ東軍に屬して功をたて、戦後功によつて紀伊三十八萬石を領し、從四位下紀伊守となつた。慶長十八年八月歿。享年三十八。

【曾子】 ソウシ 名は參、字は子輿。曾點の子で魯の南武城の人。孔子より少きこと四十六歳。父哲と共に孔子に學び、不斷の修養を惜まずしてその教を祖述し、孔子教の後世に傳はるものは曾子に負ふ所が多いといふ。殊に孝道に志篤く、一世の師表となつた。その著述と數へられるものに「孝經」一卷、禮記中の一編「曾子問」とが

あり、この他禮記諸篇中に禮・孝に關する言説を多く載せ、論語の學而・泰伯・子張・顔淵・憲問等の諸篇にとどめられた語も少くない。
 【託六尺之孤】 リクセキノコヲタクス 幼君を依託する。「六尺之孤」は十五六歳の孤兒。幼少の君。周禮地官「卿大夫職、國中自七尺以及六十」の賈公彥疏に「六尺、年十五也」とあり、古は二歳半を一尺となしたものである。

【曾子可託六尺之孤】 曾子可_レ以_レ託_二六尺之孤_一 章
 論語泰伯篇に「曾子曰、可_レ以_レ託_二六尺之孤_一、可_レ以_レ寄_二百里之命_一、臨_レ大節_二而不可_レ奪也_一。君子人與、君子人也」とあるを引いた。一章の意は「曾子が云ふことに『安んじてこれに幼君の輔佐を依託することが出来るやうな人、又國家の運命を依託することが出来るやうな人、更にまた死生の大事に際してもその節操を堅持し得る如き人は、君子の人であらうか、これこそ眞に君子の人である。』と」
 秀吉薨するの時、その後嗣秀頼は漸く六歳で、秀吉はその臨終に及んで、前田利家以下、五大老及び譜代の老臣等にこれが後事を依託した。故に利家はこの一章を引いて諸人に示し、而も「在_レ今日_一忘_レ此語_一、不可_レ謂_二之_レ忠臣_一」と斷じたのである。

【瞻】 クラシ 音は「ボウ」聲に同じ。目明かならざるの意。

「瞻學」は、學問に通じてをらない。

【洵】 マコトニ くりかへし思ふもその通りの意。「信」に略、同じ。

【惕然】 テキゼン おそれるさま。「惕」は、懼に同じ。惕懼と熟す。

【足深省】 フカクカヘリミルニタル 深く反省する價值がある。深く反省しなくてはならない。

【洵有惕然足深省者】 清正當時の境遇にあつて、而も曾子の語を解しなかつた事を思ふと「洵に我が身の不明がそら恐しく、反省しなくてはならないものがあることを感ずる。」

【惜】 オシムラクハ 惜しいことには。残念なことには。【無_レ由_レ論_レ心】 シンヲロンズルニヨシナシ 心底をうけあけあつて、語り合ふ手だてがない。

【由】 は、ここは「より從ふ所」、即ち手段・すべ等の意。【歸_二肥後_一也】 ヒゴニカヘルヤ 肥後にかへる時。

【也】 は、下を起す辭。論語學而篇に「夫子至於此國也、必聞其政」とある「也」に同じ。「時」「際」など譯す。【船間】 サウカン 船室の中にあつて。【船】 は、船の胴の間のしきられた室。

【日】 ヒニ 日々。毎日。

【以_レ朱墨_二自句_一】 シユボクヲモツテミヅカラクス 朱ずみで自分自身句讀點をつけて讀む。

「句」は、白文に句讀點をつけながら讀んで行く。

【胡孫】 コソン 猿の異名。本草綱目の註に「猿形似_二胡人_一。故曰_二胡孫_一」とあるに出た語。廣雅に「猴、一名狙、一名王孫、一名胡孫。」とある。

【遊戯】 イウギ あそびたはむれること。

【偶】 タマタマ ふと。ちやうど。二・菅公忠愛、一七四頁四行「會」參照。

【廁】 カハヤ 音は「シ」便所。

【闕_二其亡_一】 ソノナキヲウカガヒ 清正の居ない留守をねらつて。

【塗抹】 トマツ ぬりけすこと。

【坐】 ザ 「座」とすべき所。「坐」は印刷の誤であるから訂正せられたい。

【有_レ志_二聖人之道_一】 セイジンノミチニココロザシアリ 聖人の教へる道を修めんと欲する志がある。

「志」といふ名詞に讀讀する所に注意する。志・人等の名詞に讀讀する場合は、普通「於」の前置詞を置く。「有_レ志_二於_レ學_一」「有_レ人_二於_レ此_一」の如きはこの例である。此の文はその前置詞「於」が省略せられた形である。

【研】ケンス「研」は「すすり」。動詞となつて「墨をする」。

【轅】ヤム 音「テツ」「止」と略、同義で、「作」に對し作事をやめる義。

指導上の注意

本學年度終了の教材として、句讀點反點など、一通り備つた文章をだした。反復練習してこれに習熟せしめて、來學年へ進む基礎を確立しなくてはならない。これが爲には次の練習題など課して、漢文に對する自覺を明瞭ならしめることが重要であらう。

練習題

一 義明 重義

皇朝金鑑

三浦義明、爲人剛勇、重信義。家世々仕源氏。賴朝起兵、遣安達盛長、傳檄招關東將士。義明扶病出迎、盟歎讀檄、召諸兒孫、謂曰、「我老且病、朝不慮夕。今辱受命、實一家之榮也。佐公我皇世主君、既奉令旨、起義。汝等宜竭力輔翼、討滅亂賊、立功名矣。若事不成、則捨生取義、勿懷貳心。」辭氣懇切、衆皆感動。

皇朝金鑑（一・清鷹忠節出典編參照）

三浦義明（相模國三浦の人。治承中、賴朝の義兵を擧ぐるや、之に與して石橋山の急援に赴き、未だ至らずして賴朝敗死の報を聞き、去つて衣笠城に據り、諸子の諫止を斥け、城を守つて之に死んだ。享年八十九。）爲人（ヒトトナリと訓ずる。人物。人格。）

安達盛長（初め賴朝の姪が島に在るや、往來して之に仕へ、頗る忠動を勵み、後、東國の將士を説いて兵を起し、賴朝と石橋山に陣した。敗れて安房に逃れ、散兵をあつめて遂に源氏の勢を挽回した。正治二年歿。）

檄（ゲキ 兵を集むる文書、まはしぶみ。）

盟歎（クワソソツ 手を洗ひ口を漱ぐ。）

佐公（賴朝のこと。賴朝はその時に右兵衛佐であつた。）

令旨（レイシ 以仁王の令旨。國訓「リヤウジ」。東宮三宮（大皇太后・皇太后・皇后）親王の命令文書。）

起義（義兵を起す。）

捨生取義（命を捨てて、忠義を全うする。）

懷貳心（二心を持つ。）

二 宜奉勅命以誅之

賴 襄

陶晴賢弑其主大内義隆、毛利元就欲討之。然衆寡不敵。詢之於衆。三子隆景時年十九。進曰、「宜奉勅命以誅之。軍之勝敗非多寡也。元就然之。乃使香川左衛門尉光景奏之、遂討滅賊。」

註

誅（罪ある者を殺すこと。）

陶晴賢（スエハルカタ 興明の第二子。世々大内氏に仕ふ。天文十九年義隆の嬖臣相良武任を除かんとして讒に遇ひ、遂に兵を擧

げて義隆を弑した。後毛利元就と嚴島に戦つて敗死した。）

弑（臣にして君を殺すこと。）

大内義隆（義興の長子、防・長・豊・筑・石・藝・備七州を領し、漸く慢心して歳備を怠り、老臣陶晴賢、毛利元就等が屢々諫めたが聽かず、嬖臣相良武任を寵するに及び、天文十年九月晴賢の爲に弑せられた。年四十五。）

詢(トフ、謀「ハカル」也。)

隆景(毛利元就の第三子。初字は德壽丸。小早川正平の女に配して其の家を嗣ぐ。秀吉に従つて功あり、筑前一國及び肥後の二郡を領した。慶長二年六月歿。年六十五。)

三論 語抄

- 一、子曰、不_レ患_ニ人之不_レ己知_ハ、患_レ不_レ知_レ人也。(學而篇)
- 二、子游問_レ孝。子曰、今之孝者、是謂_ニ能養_一。至_ニ於犬馬_一、皆能有_レ養。不_レ徹_レ何以別乎。(爲政篇)
- 三、子曰、孟之反不_レ伐。奔而殿。將_ニ入_レ門_一、策_ニ其馬_一曰、非_ニ敢後_一也。馬不_レ進也。(雍也篇)
- 四、曾子曰、可_ニ以託_ニ六尺之孤_一、可_ニ以寄_ニ百里之命_一。臨_ニ大節_一而不_レ可_レ奪也。君子人與、君子人也。(泰伯篇)
- 五、曾子曰、士不_レ可_ニ以不_ニ弘毅_一任_ニ重_一而道遠。仁以爲_ニ己任_一。不_ニ亦重_一乎。死而後已。不_ニ亦遠_一乎。(泰伯篇)
- 六、子曰、歲寒、然後知_ニ松柏之後凋_一也。(子罕篇)
- 七、子曰、古之學者爲_レ己、今之學者爲_レ人。(憲問篇)
- 八、子曰、人無_ニ遠慮_一、必有_ニ近憂_一。(靈公篇)
- 九、子曰、過而不_レ改、是謂_レ過矣。(衛靈公篇)
- 一〇、孔子曰、益者三友、損者三友。友_レ直、友_レ諒、友_ニ多聞_一、益矣。友_ニ便辟_一、友_ニ善柔_一、友_ニ便佞_一、損矣。(季氏篇)

註

子游(姓は言、名は偃、孔子の門人。)

孟之反(名は側、魯の大夫。)

伐(ホコル。)

百里之命(一國の政令をいふ。方百里は周代諸侯の大國の面積。)

弘毅(心ひろく志のつよいこと。)

諒(マコト 信、または實なり。)

便辟(人の感情を害せざるやう機嫌を取るをいふ。)

善柔(外面のみ柔和にて内心のよからぬをいふ。)

便佞(辯口巧にして心に誠なきをいふ。)

昭和十四年三月一日印刷
昭和十四年五月廿三日發行

非賣品

不許複製
著者 能勢朝次
發行者 東京市神田區美土代町十八番地
株式會社 文學社
代表者 小林竹雄

發行所

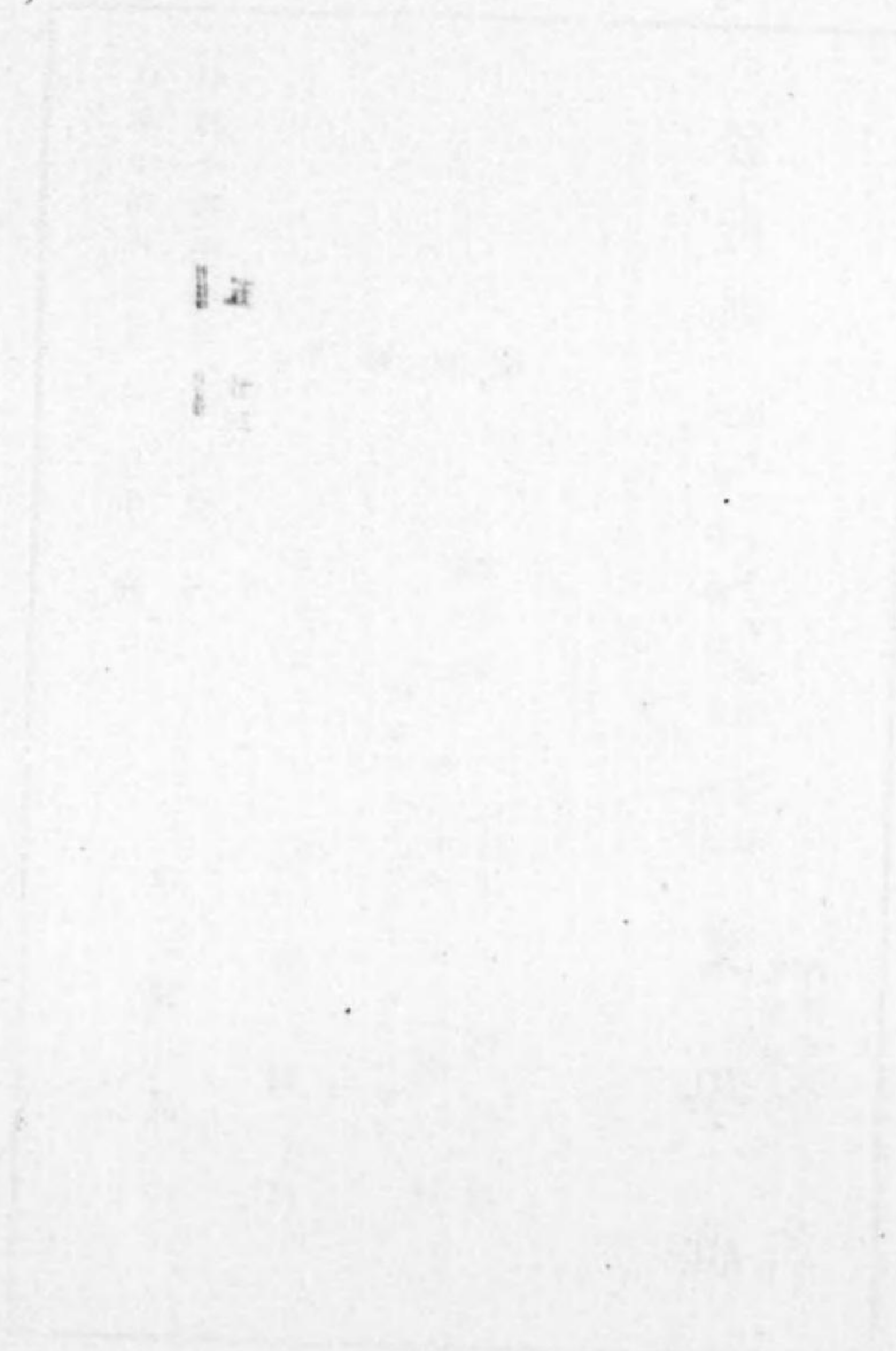
東京市神田區
美土代町十八番地

株式會社

文學社

電話 神田三五一番
振替 東京三八七八番

392
5
472



終